

東京都指定文化財

近藤 勇 の 墓

種 別 旧 跡
指定年月日 昭和11年(1936)3月4日
所 在 地 三鷹市大沢6-3-11

天保5年(1834)武州多摩郡上石原村の宮川久次郎の三男として生まれ、15歳で天然理心流近藤周助に入門、近藤家の養子となって28歳で天然理心流四代目を襲名した。

文久3年(1863)土方歳三らと京都に上り、慶応3年(1867)大政奉還までの4年間、新選組として活躍した。

京都、鳥羽伏見の戦いで敗れた後、甲陽鎮撫隊を組織し山梨県勝沼で官軍を迎え撃つが、大敗して千葉県流山で投降する。

慶応4年(明治元年)4月25日、板橋宿で処刑された。享年35歳。
法名は真天院殿純義誠忠大居士。

平成5年(1993)10月31日

三鷹市教育委員会

2015/12/14

近藤勇と新選組ゆかりの地

近藤神社

近藤神社は、徳川將軍家のために、忠誠心を貫いた近藤勇を尊び、昭和初期に東京一円の有志たちによって近藤勇の生家跡に建立された。その後、荒れるにまかされていた社を一時別の場所に移設していたが、昭和五二年に生家跡が市の史跡に指定されたのを受けて、昭和五四年に戻したものである。

調布市観光協会

市史跡

近藤 勇 生家跡

指定 昭和五十二年四月二十五日

この地は新選組局長近藤勇の生家跡である。

近藤勇は、天保五年（一八三四）宮川久次郎の三男（幼名勝五郎）としてこの地に生まれ育った。

十五歳の時天然理心流近藤周助に入門、翌年理心流の目録を得て周助の養子となり近藤姓を名乗った。

当時、宮川家の屋敷は面積約七千平方メートルの広さがあり、建物は母屋のほか蔵屋敷、文庫蔵、乾燥納屋、地下蔵、農具入納屋等があり、周囲はケヤキ、カシその他の大木や竹林が茂っていた。現在の跡地は、屋敷の東南部に位置し、昭和十八年に家がとりこわされるまで使用していた井戸を残すのみである。

平成十二年十二月一日再建

調布市教育委員会

近藤生家「宮川家」

天保五年（一八三四）十月九日、武蔵国多摩郡上石原村辻（現在の調布市野水一丁目）の宮川家に三人目の男子が生まれ、勝五郎と名付けられた。天保九年（一八三八）の上石原村「宗門人別五人組帳」によれば、宮川家は多摩郡大沢村龍源寺の旦那（檀家）で、家族構成は百姓源次郎（宮川家の当主は代々「源次郎」を名乗った）六十七歳を筆頭に、忰の久次郎四十歳（近藤勇の父）、姫のみよ三十七歳（勇の母）、孫の音次郎九歳、糸蔵七歳、勝五郎五歳の六人であった。宮川家は裕福な農民であったといわれているが、「宗門人別五人組帳」の記載をみる限りでは、石高は七石一斗二合で、上石原村では中間的な階層に属していた。

天然理心流入門、近藤家養子に

龍源寺にある「神文血判帳」（近藤周助の門人帳）によれば、宮川家の三兄弟は、嘉永元年（一八四八）十一月十一日に揃って天然理心流近藤周助の門人となっている。嘉永二年六月に周助が宮川勝五郎に与えた目録も龍源寺にある。同年十月十九日付けで周助から上石原村の源次郎（勝五郎の父）宛に養子縁組の書状が出され、勝五郎は入門後あまり時を経ずに天然理心流を継ぐため周助の養子となったことがわかる。養子になって周助の旧姓島崎を名乗り、名前も勝太と改めた。安政四年（一八五七）頃までには島崎勇となり、万延元年（一八六〇）三月に松井ツネと結婚した。その後、近藤勇を名乗り、文久元年（一八六一）八月、府中六所宮（大国魂神社）で天然理心流四代目襲名の野試合を行い、翌年には一人娘の瓊が生まれた。

浪士組に参加して京へ、そして新選組結成

文久三年（一八六三）二月、近藤勇は上洛する将軍徳川家茂警護のために編成された浪士組に道場の門人たちと共に参加したが、浪士組が江戸へ戻ることになった時、京都残留の嘆願書を提出し、京都守護職の任にあった会津藩預かりとなり、京都市中の見回りに当たることになった。以降、慶応四年（一八六八）一月、隊士と共に江戸に戻り、当時政局の中心となっていた京都で新選組局長として活躍した。

近藤勇、板橋で死す

慶応四年三月、甲陽鎮撫隊が甲州街道を甲府へ向かう途中大久保剛と名を変えた勇は、上石原村の鎮守である上石原若宮八幡神社を遥拝して戦勝祈願、西光寺向かいの名主中村勘六家で歓待を受けたと伝えられている。甲州柏尾山で官軍に敗れ、その後、新たに隊士を募集して下総流山に陣をしいた。しかし、そこで官軍に包圍されて出頭、慶応四年四月二十五日に板橋において刑死した。勇の甥宮川勇五郎は、板橋の刑場で肩の鉄砲傷（慶応三年十二月伏見墨染付近で負傷）を目印に首のない勇の遺体を掘り起こし、上石原村の生家近くにある龍源寺へ埋葬した。勇の無言の帰還を一族の人びとは野川にかかる相曾浦橋で迎えたと伝えられている。龍源寺の近藤家墓所には、勇の一人娘瓊と結婚して近藤家を継いだ勇五郎やその息子の久太郎も眠っている。また、近くには勇のいとこで新選組隊士だった宮川信吉（勇の父久次郎の妹の子）の墓もある。

2015

天然理心流道場「撥雲館」

豪農であり、かつ篤農家でもあった近藤勇の父宮川久次郎は、広い自分の屋敷内に寺子屋を開くとともに、幕末時盛んであった武術の一派「天然理心流」の道場を持つて、勇とその兄たちをはじめ近在の子弟を集めて学問や武術を指導していた。

天然理心流は、近藤長裕を初代とする流派で、江戸に道場を持つたわら多摩地方に広く出稽古を行い、門弟の指導にあたっていた。小技よりも氣迫を重んじ、いかなる相手にも動じない極意必勝の実践を大事にする武道であった。三代目近藤周助は、月に二・三回招かれて久次郎の道場に通っていたが、勇の度胸と技量を見込み、嘉永二年（一八四九）近藤家の養子として迎え入れた。時に勇十六歳、後二十八歳で四代目を襲名した。

この道場は、明治九年（一八七六）に近藤家の養子となり、勇の一人娘瓊と結婚して天然理心流五代目を継いだ近藤勇五郎（勇の長兄音五郎の次男）の道場で、勇五郎は多摩一門の門人三千人を指導したともいわれている。勇五郎は明治九年に父から分け与えられた屋敷内の納屋を道場とした。この道場が「撥雲館」である。その名の由来は、ある時ここを訪れた山岡鉄舟（元幕臣。近藤たちが浪士組に参加して上洛した時の浪士取締役）が命名し看板に揮毫したと伝えられている。「撥」という字は「とりのぞく」という意味を持つているが、「撥雲」という館名は暗雲を取り除くという意味で、当時の世相からみてうなずけるものがある。撥雲館は、その後手狭になったため、門下生の協力で昭和七年（一九三二）北側空地に改築し、盛大な道場開きが行われた。しかし、勇五郎は翌年八十三才で亡くなった。その後も道場は門人たちの手で維持され、昭和五十年代まで稽古が続けられていた。大平洋戦争が始まり、調布飛行場の建設に伴う勇五郎宅取壊しの際にも、門人たちの熱意によって、道場は勇五郎の娘の嫁ぎ先である東隣の峯岸家の土地に移築された。さらに戦後になって、人見街道の拡幅のため再移転する時、再び近藤家敷地内の現在地に移築され、今日に至っている。

平成十六年三月二十六日

調布市・調布市教育委員会